真・恋姫†無双～永遠の軌跡～

十六夜 白爛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～永遠の軌跡～

【Ｎコード】
Ｎ８３８６Ｙ

【作者名】
十六夜　白爛

【あらすじ】
私は聖フランチェスカ学園の生徒。ある事件に巻き込まれ、私は死んだ。でも、目が覚めるとここは……

プロローグ（前書き）

至って普通（？）のプロローグ……始まります。

プロローグ

「親父おかわり！」

「ハッハッハッ、たーんと食えよ。魁瑠」

ある日の朝、少し赤髪をした男が父親と思われる人と食事をしている。そして、ご飯をもりもりと食べている男が徐晃　公明　真名は魁瑠。

真名とは許される者が呼べる名前であり、それ以外の者が呼べば即討ち首もの。それほど凄い名前なのだ。

「それより親父、一緒に修行するんじゃないの？」

「ん？　そうだったか？」

「おいっ！　誘ったのはアンタでしょ！」

そんなコントみたいな話をしていたら、１つの光がとある場所に落ちてきた。

「何だ、あれ……」

落ちた場所は幽州、後の蜀になる場所へ落ちたのだ。それをあまり気にしなかった徐晃は、淡々と父親と修行を積むのであった。

そしてその時間より少し前の同日、とある少女はハイジャックに遇い殺された。そこで彼女はまた命を貰う代わりに異世界に行く、それを条件に転生した。

髪がショートで群青色の彼女の旧名は秋奈（あきな）　月詠（ツクヨ）、現在の名は高順

公台。呂布の武将の1人だ。

「天照さん、お風呂わきましたよ」

「ありがとう、月」

1人少女は満月を見て思うのであった。あなたはどこにいるの、と。そんな高順を後ろから心配そうに見つめる女性がいた。その名は董卓　真名は月、見るからに優しそうなオーラを出す少女は、後の反董卓連合で倒される人物。しかしそれは正史の話、ここにいる人物は女性にして三國志の有名な将、実力はかなりのものである。そんな不安そうな目をしている董卓に優しく「大丈夫」とささやく。

「どこにいるの、魁瑠（カイル）……」

彼女の魁瑠とは徐晃である。高順曰く、徐晃と高順は幼なじみであり部活の先輩後輩。聖フランチェスカ学園に通う2人だが、ある日魁瑠は突然いなくなったのだ。

「考えても仕方ないわね」

パサッとその場で服を脱ぎ、風呂場へ移動する。
この時代の風呂はかなり珍しく、5日に風呂が入れるかどうかだ。
そんな貴重なお風呂を一一番乗りで入れるのはかなり幸運である。

「熱い」

「そうね、少し熱――！？」

先客がいたみたいだ。赤髪をした少女、名は呂布　真名は恋。あの

三國志最強と言われた呂布である。そしてもう1人いるのは名は華雄、真名は藍梨。正史では関羽が討ち取り、破れた人物である。

「おお、天照ではないか。どうなさった？」

「どうもこうもないわよ、私が一番乗りと思ってきてみれば恋と藍梨に先越されて……」

グチグチと喋り、恋と藍梨はのぼせている。それを後から来た月に助けてもらったのはまた別のお話。

プロローグ（後書き）

はい。という事で新しく書いてみました。
さて、この小説がどんな行き先になるのかは次回を御参照下さいませ。

キャラ説明（前書き）

魁瑠と月詠の簡単なプロフィールです。

キャラ説明

旧名：赤星（あかぼし）　魁瑠（カイル）

姓：徐

名：晃

字：公明

真名：魁瑠

性格：かなりお転婆で、軍議に遅刻すること多々ある。関羽のことを理想像と考え、いつか乗り越える目標としている。

武器：旋刃盤　（火炎斬魔盤）

備考：前世の記憶はない。あるのは誰かと約束をしたこと。しかし、彼にとってはもうちっぽけな話。

旧名：秋奈（あきな）　月詠（ツクヨ）

姓：高

名：順

字：公台

真名：天照

性格：冷静

武器：双剣（白天・黒燐）

備考：魁瑠の幼なじみで、なんとなく華雄のストッパーの位置。怒るとその殺気で空気どころか恋すら震え出す。
もし魁瑠と再会したら「とりあえずはっ倒す」つもりらしい。

キャラ説明（後書き）

次回はいきなりですが、黄巾の乱に移ります。

では、次回までさよならです。

黄巾の乱～序章～（前書き）

今回は黄巾の乱の序章です。
どうぞ、見てってください！！！

黄巾の乱～序章～

「なあ魁瑠、お前…旅してみないか？」

朝、徐晃の父が意外な発言をした。
旅に出てみる、それはどこかの国に移住すると同じであり、そして今の時代は旅に出ることは危険が伴う。
それを承知した上での旅とは生きるか死ぬか、つまり乱世を生き抜くには戦わなければならない。

「んでさ、親父は何で俺に旅をしろとか言うんだ？」

「……世の中には俺らより強いヤツがわんさかいる、わかるな？」

「親父……」

スタスタと父親の前に来て、肩をポンポンと叩く。

「分かるかぁぁぁぁっ！！！」

おもいっきり父親の脳天に踵落としを炸裂させる。
父親はゴロゴロと転がって頭を押さえながら『キッ』と魁瑠を睨み付ける。

「父親に向かって踵落としは無いだろ！！」

「うるせええ！！！　それだけじゃ分かるわけないだろ！！！」

「お前は父さんに似ている、だから分かる！！」

「もはや言葉が意味不明だ！！」

そんな漫才のような話をしていると、父親が少し真面目な顔をして重い空気になる。

「魁瑠よ、俺は結婚する前は旅人だったと知っているな？」

「あ、ああ……」

「旅とは幾つもの試練を乗り越える、しかしそれを乗り越えれば父さんが言っていたことがわかるはずだ」

魁瑠は数秒間考え、徐一族に伝わる代々の宝具、旋刃盤　『火炎斬魔盤』を取り出す。
その行為に仰天する父だが、旋刃盤を持つとはどんな意味なのかすぐにわかり、『フゥ…』とため息をつく。

「行ってこい、徐一族をなめられないようにな」

「あぁ、わかった」

場所は変わって洛陽。高順こと天照は自分の武器、双剣『白天・黒燐』を見てため息をつく。
そこへ紫の髪をして胸元にサラシを巻いた女性が来る。
その者の姓は張、名は遼、字は文遠、真名は霞。
後の魏の武将となる人だ。

「霞、何の用かしら？」

「何の用とは失礼やな、ウチは自分を心配してここまで来たんやで？」

「はいはい。で、何の用なの？」

張遼は「洛陽の近くに黄巾賊が攻めてきている」と言う。そして高順は『黄巾賊』と言う単語に心が引っ掛かった。
『黄巾賊』とは、誰もが知る黄巾の乱で黄色い布を身につけている盗賊達の総称。
その黄巾賊の主導者と言われているのは張角、張宝、張梁と呼ばれる3人である。

「黄巾賊がここまで攻めてきた……血が騒ぐわね」

高順の一言で一瞬大気が震える。そんな感じがした。
白天・黒燐を持ち、張遼の言う黄巾賊が攻めてくる場所まで馬で移

動する。

「ち、ちょっ、待ちぃや！　天照だけで行くのは危険や！　ウチも行く」

「霞は後から藍梨と来るように、お願い」

お願い、そのセリフに弱い張遼は、「死んだらアカンで」と言って華雄を呼びにいく。

「……私は死なないわ、月を守りきるまでは……！！」

ふと空を見上げると……今宵は満月、その満月の光を赤く染め上げよう、そう考えながら馬を走らせる。

その頃魁瑠は、黄巾賊と戦っていた。

「せやぁぁぁっ！！！！！！」

「ぐふっ！？」

「な、何だコイツは！？」

「俺は徐　公明、お前ら黄巾賊をブッ潰す男だ！！！」

「てやぁぁぁぁっ！！！！」

旋刃盤を投げ付けて絡ませ、相手が怯えたところで一気に引く。相手は物言わぬ肉塊になった。

「さぁ、次はどいつだ！！」

「ええい、1人相手に何してるんだ！　押せぇぇぇぇっ！！！！！！」

「無理だよ、お前らじゃな」

黄巾賊の一人が後ろを見るとそこには徐晃がいた。
徐晃は『ニコッ♪』と笑い、火炎斬魔盤を投げ付け、旋刃盤の刃を相手に刻み付ける。

「はあっ！！」

「ぐぁぁぁっ！！！！　あ、熱いぃぃぃっ！！！！？」

斬られた場所から熱が発生し、悶え苦しむ黄巾賊。
徐晃は次々と敵を斬り裂き、敵はとうとう最後の1人となった。

「これで――」

魁瑠は火炎斬魔盤を上にあげ、勢いよく振り下ろした。

「終わりだぁぁぁぁぁっ！！！！！！！」

魁瑠が斬り終えると、突如として雨が降り出す。
それは何かの始まりを告げるように、何かを示すかのように。

「親父、俺はこの乱世で生き抜くことが出来るのかな……？」

1人しんみりと雨に慕っていると、向こうから1人の黒髪の女性が現れる。
黄巾をしていない、殺意も敵意もない。けれど、一応警戒をする魁瑠。
気を抜けばなもなくばやられる。そんな事を考えていると、黒髪の女性が声を掛けてくる。

「ん？　貴様、ここで何をしているのだ？」

「……ただの通りすがりです」

「これは貴様がやったのか？」

「はい、民が襲われていたので我慢が出来ず滅しました」

「うむ……」と黒髪の女性が頷く。
すると、次は水色の髪をした女性と金髪の少女が馬に乗りながら徐晃のところに来る。

「これは……華琳様！」

「ええ、この力は……」

華琳と呼ばれた少女は『スッ…』と徐晃を見て、「ふむふむ…」と1人でに納得する。
わけがわからない徐晃は恐る恐る聞く。

「えと、何か……？」

「これ、あなたが全部やったの？」

「あ、はい。民が襲われていたので、1人で黄巾賊を殲滅しました。
……何か不味かったでしょうか……？」

「……」

華琳は無言でジロジロと魁瑠を見る。
彼女は何か覇気のようなものを纏っている。
しかし、その覇気がなくなるように『ニヤリ』と笑う。

「ねぇ、貴方私のところで働かない？　あなたの武、見てみたいわ」

「え、あ……しかし、名も知らぬ者に付くのは……」

「あ、名乗り遅れたわね。私の姓は曹、名は操。字は孟徳よ」

「！！！？…し、失礼いたしました！！　姿を知らぬ故、誠に失礼な発言を致しましたことをお詫び申し上げます！！」

彼女は曹操、知る人ぞ知る魏の覇王。
黒髪の女性は夏侯惇、字は元譲。魏の将で、曹操の右腕。
水色の髪の女性は夏侯淵、字は妙才。夏侯惇の従姉妹であり、弓術が優れている。
この３人は、三國志の魏では中心となっている人物である。

「謝るのはいいわ、…それより先ほどの答えが聞きたいのだけれど？」

「はっ！！…私、徐　公明は曹操様に仕える事をここに誓います。放浪の身となっていた私を救って頂いたことを感謝いたします」

徐晃は感じていた。
曹操がこの先素晴らしい世界を見せてくれるのだろうと。
そしてこの先も。

……一方、高順は黄巾賊の殲滅に急いでいる。

「遅くなってすまない！」

「よっしゃ！　ウチが来たからには容赦せえへんぞ！」

華雄と張遼が着き、３人で殲滅に取り掛かる。

「……はあっ！！！」

高順は白天・黒燐で相手を斬り刻み、腹に風穴を開ける。すると後ろから矢が飛んでくる。

しかし高順は動かない。
後ろに華雄がいるから、最も信頼を寄せているから必ず守ってくれるだろうと信じていたから。

「たぁっ！！」

高順の予想通りに華雄は後ろから登場して矢を弾く。

「よっ…しゃ！！」

思わず口にだし、ガッツポーズを取る。

「流石は藍梨ね、私も本気を出そうかしら？」

「今までホンキじゃなかったちゅうことか、怖い怖い」

それぞれが奮闘して黄巾賊を殲滅。３人のお陰でこの地は守られたのであった。

黄巾の乱～序章～（後書き）

序章なので、とりあえず黄巾の乱編は続きます。

どこか誤字や言葉の用法が違ってたりしてましたら教えて下さい。

黄巾の乱　其ノ一（前書き）

はい、更新です。

感想下さいね？

黄巾の乱　其ノ一

「華琳様！　なぜあやつを仲間に入れたのですか！　あんなどこの馬の骨かもしれないあやつを……」

朝、魁瑠こと徐晃が目を覚ますと、春蘭こと夏侯惇の声が廊下に響いた。勿論、徐晃のことについてだ。

そりゃあ、魏に得体の知れない輩が突然入ってきたのだ、納得いかないのもうなずける。

そして夏侯惇は徐晃を殺そうと企てるが当然却下。

納得のいかない夏侯惇は徐晃に決闘を申し込む。この決闘で斬るべき奴か否かを定めるつもりでもあった。

「面白そう」と乗ってきた徐晃とガチな夏侯惇。

2人は城内の広場で準備運動した後、構える。

「これで私が勝てば貴様は此処を出ていく、貴様が勝てば好きにしてよい、いいな？」

「了解、俺は強いぜぇ～？」

タンタンとリズムを取り、審判の夏侯淵の合図で徐晃が先に動く。旋刃盤を横に投げ、夏侯惇を捕まえる。しかし、夏侯惇をニヤリと余裕を見せている。策があるのか、と小声で言う。

当然昔から一緒にいる曹操と夏侯淵は『ないない』と心の中でツッコむ。

「はあぁぁぁ！！！！！」

夏侯惇が力を入れると旋刃盤の糸が切れる。予備の糸を持ってきてるとはいえかなりの力である。
曹操、夏侯淵もビックリはしているが、当たり前のように振る舞いをする。

「さすが夏侯惇将軍、やはり一筋縄ではいきませんか」

「ハッハッハッ、これぐらいで驚いては困る」

替えの糸を火炎斬魔盤にセットして、今度は縦に投げ付ける。しかし夏侯惇は『ズガガッ』と旋刃盤を大剣で受けとめ跳ね返す。
さすがは猛将である夏侯惇。

「さて、一気に決めるぜ！！」

「ハッ、貴様ごときにやられる私ではないわーー！！！！」

ギンと金属音がする。結果は一歩のリードで徐晃が勝利に終わった。
そして時は過ぎ、１８４年。黄巾の乱が始まろうとしている。曹操に仕える将、孫堅に仕える将、劉備に仕える将。それぞれが準備して黄巾党を前にする。

「皆の衆、よくここに集まった。聞いてはいると思うがここにいる者は黄巾党を蹴散らす為にいる。皆力を合わせ黄巾党を殲滅させるのだ！」

「おおぉぉぉ！！！！！」

何進の号令により全軍が黄巾党に向かって突撃。

「……」

「……魁瑠、何を恐がっているのだ？」

夏侯惇が乗馬で進軍している時、徐晃の顔色の変化に気付く。顔が真っ青でもなく気分が悪そうでもない。
夏侯淵はそれを察し、「無理をするな」と言って先を走る。

「ありがと、秋ら……っ！？」

夏侯淵の真名を呼ぼうとしたら、いきなりの頭痛に襲われる。さっきまで平気な顔をして進軍の準備をしていたのに、黄巾党に向かうたび頭痛の激しさが違う。近づくたびに痛みは酷くなり、馬を休めるしかない。

「ぐあっ……くっ……誰かが……待って……うっ……！？」

しばらくすると頭痛の痛みが引き、体が楽になる。
さっきのは何だったのか、誰が待っている、そんな思考をしていると、黄巾賊の1人が徐晃の後ろに回り込み、剣を振り下ろす。
しかし徐晃は体を動かさない、否、動かせないのだ。

「はあっ！！！」

その時、1人の女性に助けられる。

姓は関、名は羽、字は雲長に助けられるのだった。
正史の関羽は蜀の軍人、そして劉備の義理の弟でありながら張飛の兄。
そんな関羽は徐晃に手を差し伸べる。

「大丈夫か？」

「あ、はい」

「お主の名を聞こう。私は関羽、字は雲長」

「徐晃、字は公明、魏の将。助太刀感謝する」

倒れていた徐晃をおこし、火炎斬魔盤を構える。

それを見ていた関羽も青龍厭月刀を構え、２人で黄巾賊を斬る。
次々と黄巾賊を倒し、坂を上ろうとしたら黄巾を巻いた少女が岩を操り、先へ進めない。

「そんな……」

「こんなもの、どうすれば……」

立ち止まり、唖然とした徐晃と関羽に何進からの伝令の使いが来る。

「何進様より伝令です。橋が上がってここには来れないようです。すぐに橋をおろせと申しております」

「徐晃殿、どうしますか？」

「あの何進殿からの伝令だ。行かないわけはないよ」

「では、私は先へ、出来る限りの手は打ち、先へ進めさせます」

「わかった、ご健闘を」

再び馬にまたがり、何進の言っていた橋が見える。
だが誰もいない、誰もいないと言うことは何かしらの策があるに違いない。
辺りを見回し、誰か要注意人物や何かの罠がないか調べ、橋をおろす。

「ご苦労だったな、徐晃よ」

「いえ、こういう仕事も兵の行動の１つかと」

「時に徐晃、伝令の者から聞いたのだが、岩がひとりでに襲うたそうじゃな」

「はぁ、誰がやったのかもわからず、いまだ苦戦中のこと」

「うむ、なら簡単じゃ。ワシの馬を使って行けばよいじゃろう」

そんな、と言い掛けた時、魏軍の伝令が徐晃に近づく。

「伝令、夏侯惇将軍より援軍に来てほしいのことです！　準備が出来次第来るように」

徐晃は目を瞑って１０秒ぐらい瞑想する。
神経を集中させ、火炎斬魔盤をヨーヨーのように回して肩に置く。

「何進殿、馬をありがとうございます」

「よい、それより早く行かぬと味方が大変じゃないのか？」

「あ、はい！」

力強く返事した魁瑠は、何進から渡された馬に跨がり、夏侯惇の所に向かった。

黄巾の乱　其ノ一（後書き）

さて、今回は黄巾の乱の一話目です。
誤字等がございましたら、感想に記入してくださいませ。
それでは、次回をお楽しみに……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8386y/

真・恋姫†無双～永遠の軌跡～

2011年12月11日18時54分発行